

『堺事件』二つの疾走

藤 森 賢 一

鷗外は、その『堺事件』（大正三年）で二人の男を走らせている。その一人は、駕頭の梅吉という男で、旗持ちである。いま一人は、フランス公使「Le Comte」である。この二人の男の疾走の意味を考えてみようと思うのである。

鷗外の『堺事件』は、慶応四年の二月十五日に泉州堺で起きたいわゆる堺事件を素材とした歴史小説である。その事件というのは、同地警備のため派遣されていた土佐藩の兵士が、上陸して来たフランス水兵を銃撃、その中十一名を殺害した維新史中の「Sadohara」。フランス側は、発足して間もない新政府に向けて嚴重なる抗議を為し、極刑ともいふべき下手人の処罰と多額の賠償、それに土佐藩主の直接佛艦に赴いての謝罪を求めた。新政府及び土佐藩は直ちにこれに屈し、土佐藩の兵士にして発砲せる者二十名をして堺の妙国寺にてフランス側代表臨検のもと切腹をせしむることを決定、又、土佐藩主は賠償金十五万ドルの支払いを約し、更に形式的ではあっても、佛艦に謝罪のため出向いたのである。

鷗外は、この事件を佐々木甲象の筆になる『泉州堺烈挙始末』（明治二十六年）を資料として小説『堺事件』をものしたといわれる。鷗外の拠った資料はこれ一冊のみであるが、原拠の資料があるならば、例の「歴史其假」と「歴史離れ」の問題が生ずる筈である。果して大岡昇平氏が、『堺事件』の構図——森鷗外における切盛と捏造——¹⁾でこれを批判した。

日記によれば、鷗外が「大塩平八郎」の「附録」を書き終ったのは、大正二年十二月十一日、『堺事件』の成稿は五日後の十六日である。切盛と捏造はしないといった舌の根も干かぬうちに、なぜこのような犯罪的捏造をする気になったか、その心事の方が一層重要だろう。（傍点藤森）

この大岡発言については、私にいささか異論があり、鷗外弁護の用意は出来ている。しかし、今これには関らない。何となれば、『堺事件』の主題やモチーフに関しての大岡氏の発言に、より本

質的な失考が見受けられ、それをこそこの際問題にしなければならぬと考えるからである。大岡氏の説を同じ論文から引くことにする。

一方には無法な洋夷としてフランス人がおり、他方これを排除せんとした、皇国意識に目覚めた土佐藩士がいる。彼らは洋夷の圧力によって切腹しなければならなかったが、正にその切腹によって洋夷を遁走せしめた。(中略) 鵜外が捏造したこの構造ほど(明治末から大正初めにかけて、「開国征夷」を国是とした)山県体制に役立つものはなかったであろう。

このことに触れて、蒲生芳郎氏は、大岡氏の右の一文を引用した上で、次のように大岡氏の所説を要約している。

つまり、『堺事件』は、表面上の「公平めかした疑似考証性」にもかかわらず、かつまた作者の度重なる「歴史の自然尊重宣言」にもかかわらず、実は、「主人に忠実な」「体制イデオログ」としての鵜外が、山県の下らない政治に奉仕する「ために、原資料に「夥しい」「切盛と捏造」を加えてでっちあげたでたらめな歴史小説にほかならぬ——こう言い切るところに、大岡氏の『堺事件』論の最終的な結論がある。

「堺事件」論覚え書——大岡昇平氏の「堺事件」論をめぐって——

かくのごとき言辭で以て糾弾されては、鵜外の名誉にも関わりうというもの。大岡氏の鵜外批判の可否を冷静に検証せずばなるまい。

大岡氏の鵜外批判を読んで、直ちに連想するのは、太平洋戦争中薩英戦争を素材として作られたお粗末な戦意昂揚の国策映画(たしか、「海賊旗吹ツ飛ぶ」という作品であつたとおぼろげに記憶する)である。それは、薩摩の若侍たちが英艦に果敢な斬込みを敢行、「洋夷」を「遁走」せしむるという内容。今の場合、「斬込み」が「切腹」と違っているに過ぎない。鵜外の「堺事件」をこのような読み方で論じていいものなのか、という疑問が私には強く迫って来る。

大岡氏は、同じ論文で、「物語の主題は、土佐兵の正当さと殉難である」と軽くいつてのけている。「土佐兵の正当さ」が、本当にこの作品で主題としての資格を具備するや否やには問題がある。第一、「正当さ」は描けているのか。又、土佐兵の「正当さ」をいう為には、フランス兵の「不当さ」を讀者に強く印象づけねばならぬのであるが、それは果されているであろうか。

同じ日の暮方になつて、大和橋から歸つてゐた歩兵隊の陣所へ、町人が駆け込んで、港からフランスの水兵が上陸した

と訴へた。フランスの軍艦は港から一里ばかりの沖に来て、二十艘の端艇はしづなに水兵を載せて上陸させたのである。兩歩兵の隊長が出張の用意をさせてみると、軍監府から出張の命令が届いた。すぐに出張して見ると、水兵は別にこれと云ふもたら立つた暴行をしてはゐない。併し神社佛閣に不遠慮に立ち入る人家に上り込む。女子を捉へて擲擲ふ。開港場でない堺の町人は、外国人に慣れぬので、驚き懼れて逃げ迷ひ、戸を閉ちて家に籠るものが多い。兩隊長は諭して舟へ返さうと思つたが通辨がゐない。手真似で歸れと云つても、一人も聴かない。そこで隊長が陣所へ引き立ていと命じた。兵卒が手近にゐた水兵を捉へて繩を掛けようとした。水兵は波止場をさして逃げ出した。中の一人が町家の戸口に立て掛けてあつた隊旗を奪つて驅けて往つた。まへ

この程度の記述で、土佐兵の「正当さ」やフランス水兵の「不当さ」を作者が主張しているとするのは無理であると思ふ。大岡氏が、この作品の主題として挙げたいま一つの「土佐兵の殉難」は、これを認めるに吝でない。ただ、大岡氏のこれに向ける洞察の度に、いま一つ深みの伴ふぬ点があるのに遺憾の意を抱かざるを得ない。即ち、「殉難」に関わる要因の考察が欠落しているのである。

鷗外が、お上の処置に従つて、従容として切腹の場に臨み、隊

長一人を除いては、本来士分の扱いを受けていない輕輩ながら、夫々に見事な自殺振りを示すのを描くところには、一種の悲壮美が造型されている。読者がこの土佐兵たちに対して尊敬と同情の感情を抱くことへの期待は、作者の意識に十分認められるところであろう。尊敬や同情は、人情としてその死を悼む気持ちに直結する筈であり、更にそれは、彼らの悲劇が何によつてもたらされたかを考えさせる。鷗外は、その点、作中に於て、主観を説明的に記述する方法を意識的に避けている。われわれは、その淡々とした事実の客観的叙述を通して作者の主張を推理するしかない。事件は、鷗外の作品にあつては、その引き金が次の部分にあつて惹き起こされたと断ぜざるを得ない。

兩隊長は兵卒を率ゐて追ひ掛けた。脚の長い、驅歩かきふに慣れたフランス人にはなか／＼及ばない。水兵はもう端艇はしづなに乗り移らうとする。此頃土佐の歩兵隊には舊の者が附いてゐて、市中の廻番をするにも、それを四五人宛づ連れて行くことにしてあつた。隊旗を持つのも此舊の者の役で、其中に旗持梅吉と云ふ鳶頭がゐた。江戸で火事があつて出掛けるのに、早足の馬の跡を一間とは後れぬといふ驅歩の達者である。此梅吉が隊の士卒を駆け抜けて、隊旗を奪つて行く水兵に追ひ縋つた。手に持った鳶口は風を切つて彼水兵の腦天に打ち倒された。水兵は一聲叫んで仰向に倒れた。梅吉は隊旗を取り返し

た。

これを見て端艇^{はしけ}に待つてゐた水兵が、突然短銃で一斉射撃した。

梅吉なる人物については、その「驅歩」の速きことを語るのみであるが、一般的に考えて、思慮見識判断力等において知的な存在を期待することはできない。「驅歩」の速きを誇り、旗持ちの役を与えられて得意になっている愚かしき存在であらう。愚直な者の愚かしい責任感や功名心が大事件を発生せしむることはよくあることである。従つて、この場面における旗持ち梅吉の疾走に、作者が或る意味を託したと見るのは不自然でない。

悲劇の要因の第二にも言及しておこう。それは、この作品の主人公と作者がいつている隊長箕浦猪之吉の思想である。隊長は指揮官であり、命令者である。そして、その指揮や命令には、更に上位者の指示を仰ぐ部分もなくてはならないが、急迫緊急の場合の判断は、その心意に底流する平素の信条にもとづくのである。その信条が、多数の不幸の養生を制御する理性的なものである場合はよいが、その逆の誤てる情念に根を下すものである場合は、悲劇的である。箕浦猪之吉の場合がそれであり、その思想は「攘夷」であつた。

作者はこの箕浦猪之吉の思想につき、作中直接非難の言を投ずることはしていない。ただ、切腹を目前に控えた箕浦が、揮毫を

求められ、「腹笥の七絶」を書く場面で、作者は、「攘夷はまだ此男の本領であつたのである」と記す。その「まだ」に何を読み取ればよいのであろうか。

指揮官の命令に従つて兵士達が行動し、その結果、罪せられ貴重な生命を失わねばならぬ敵目になる不条理は、すでにいくらかの人が、先の大戦によつて生じたB・C級戦犯の問題にからめて発言しているところだが、そうした末端の人々の不幸のよつて来るところに指揮官の思想や情念が存することは、この作品において、作者の意識になかつたとはいひ切れない。

大岡氏は、先に引用した論の中で、「鷗外が捏造したこの構図ほど（明治末期から大正初めにかけて）『開国征夷』を国是とした）山県体制に役立つものはなかつたであらう」という。「征夷」は「攘夷」のより積極化したもの。その侵略思想の頭目山県へのゴマ摺りを目論んでの作が「堺事件」だという大岡説は、「洋夷」の「遁走」に快哉を叫び濫飲を下げる「堺事件」の読み方なしには成立しない。が、果してそれはそうなのか、そこが問題なのだ。大岡氏は、その最晩年に、『堺港攘夷始末』（平成元年）をものした。これは絶筆となり、しかも未完のまま終つてゐるが、解説を草した菅野昭正氏の言によれば、「未完に終つたといへえ、たぶん構想の九割以上は書かれてゐる」と思われる歴史小説である。大岡氏がこの作をものとした動機は、鷗外の歴史小説を、実作により批判せんとするところにあつたと思われるのであるが、

大岡氏にとって、真の歴史小説とは、この作品で見える限り、資料の比較検討分析を通じて、史実に肉迫せんとするものの謂であるようだ。それは、「歴史小説」の「歴史」にアクセントを置く考えであらう。しかし、「小説」にアクセントを置く考えからすれば、必ずしもそれが規範としての資格を有するものでもない。が、それはそれとして、今は、「堺港攘夷始末」の次の二点に着目してみたい。

先ず第一点。大岡氏は、二月十八日の神戸居留地にある外国人墓地で挙行されたフランス水兵十一名の埋葬式におけるフランス公使^{Comte de Montebello}の弔文を訳出した後、「フランス側死者の姓名はみな記録されている。痛ましいのは、そこに多くの若い徴募兵がいることである。(中略)切腹させられた土佐藩士十一名も痛ましいが、殺された十一名の若いフランス兵も可哀そうなのであった」と記している。

ここに見られる人間的な同情は、資料を通しての事実に対して向けられたものであって、鵠外の「堺事件」に描かれた小説の内部のそれとは区別しなければならぬが、しかし、先の「堺事件の構図」——森鵠外における切腹と捏造——執筆の時点にはなかったやさしさの目が生み出した記述である。その時点でこうした心情や視点を大岡氏が獲得していたならば、少くとも、「洋夷」「遁走」といったおぞましくも露骨な価値判断はなされなかった筈である。

鵠外の「堺事件」においては、作者の心情は土佐藩の十一名の

犠牲者に向けられ、更にそれは生き残った九名の運命的な悲劇にまで及んでいるのであるが、大岡氏のごとく、それがフランス側の犠牲者にまではひろがっていない。しかし、鵠外の目論むところは、決して大岡氏のいう「洋夷」を「遁走」せしめた快挙の顕彰ではなく、殉難の悲劇を語ることである。そして、その要因の一つに、指揮官の思想信条があつてみれば、ことはその執筆時の日本という国家の政治軍事の頭目山県を想わずにはおかない。山県は「攘夷」以上に悲劇の可能性をほらむ。鵠外の意識に

「征夷」は「攘夷」以上に悲劇の可能性をほらむ。鵠外の意識には、かかる点を危険を冒しつつも、小説の形を借りて表出せんとした形跡があるのではないだろうか。さすれば、鵠外と山県との相関図についての見方は、私と大岡氏とは全く逆になるのである。

全体、大岡氏の鵠外と山県との関係についての言及には、例えば中野重治氏に見るような皮相な断定が先入主となっているのではないだろうか。

中野氏は、その著「鵠外 その側面」に収めた文章で、次のようにいつている。

……鵠外は、山県有朋のところで山県の歌グループとしての常盤会を世話したのである。まったく封建的といつていいような形で山県にむすびつけられていた鵠外に、あらゆる封

建的なものから逃れようとするかのような青年文学者たちが結びつけられていた。それはこういうことである。鷗外の訳したイブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」を自由劇場がかけて、当時青年であつたあらゆる人に影響をあたえ、鷗外の作では「青年」のなかに一つの記念碑をのこしたそのときに、山県と山県的な日本とは「韓国」を朝鮮から暴力でうばいつつあつたということである。（中略）一九一〇年に八十二歳で家出をしたロシヤのトルストイは野たれ死をして、鷗外の「主人」ともいふべき山県は、世にも陰惨な、ほとんど畜生道ともいふべき陰謀、幸徳事件という事件をつくりあげる陰謀の細工をすすめていたということである。このことに鷗外は決して責任を負うものではない。責任を負うものではないが、そのことが事実としてあつたのである。鷗外の手はわかかわかしい青年のあいだへ伸びていた。同時に山県のところへ、その凍った灰色のなかへ伸びていた。（小説十二篇について）

：鷗外は、今では知られているとおり、山県有朋などとも組んで、新しい階級の勃興に鎮圧を与えるために精力を傾けてたつた。（漱石と鷗外との位置と役割）

こうした鷗外と山県との関係への皮相な観方に影響されては、鷗外の作品の内容の濃い読解は不可能となるのである。

大岡氏の『堺港攘夷始末』で着目すべき第一点は、大岡氏がそれの執筆の途次において、鷗外が資料とした佐々木甲象の『州堺烈挙始末』なる刊行物の性格に関連して谷干城を調べたことである。そもそも、佐々木甲象のその書は、大岡氏の解説によると、刊行の動機が、「殉難者の遺族と関係者の依頼」により、「靖国神社への合祀、贈位」といった「顕彰」を願う点にあつた。そして、その運動に土佐出身の將軍谷干城が強く関わつたという事実があるのである。大岡氏は、その『堺港攘夷始末』の末尾近くで、この件に言及、谷干城を紹介して次のように記述している。

谷干城はすでに見たように板垣と共に会津城攻めに参加している。板垣の自由民権主義には同じなかつたが、西南戦争時の熊本鎮台を固守した將軍として最も有名である。陸軍中將、子爵に列せられたが、山県有朋に抗して専守防衛の兵制を主張し、陸軍を逐われた。（傍点藤森）

大岡氏は、この後、角川版『日本史辞典』の谷干城の項までを全文引用しているのであるが、この部分を執筆していて腦裏に去来したのは、恐らくその『堺事件』論の結論とも目すべき末尾の部分であつただろう。

文豪鷗外の学識と文才に私は尊敬を失つてはいないのであ

るが、人は比類のない才能をもって、最も下らない政治に奉仕することがある。明治末から大正初めに到る山県体制が抗爭的であった時点では、彼が主人に忠実なイデオログとして働いた、と見做すのが、「堺事件」のこれまで検討した揆造と、繰返される歴史の自然尊重宣言とのあり得べからざる矛盾の一つの解であろう。

鷗外の「堺事件」は、鷗外の意識と関係のあるなしに関わらず、その資料となった佐々木甲象の書の特刊行の動機や性格、更には山県と著しき確執のあった谷干城の関与した運動と響き合うものがある。従って、それは決して彼の「主人」とされる山県の考課表にプラスの採点がなされる体ものではない。従って、敏銳な大岡氏の頭脳に、一瞬「あれは不味かった」の思いが走ったに違いない。恐らく彼の生命が「堺港攘夷始末」の完成まで存続し、更に余分の時間が与えられていたならば、それについての訂正意見の開陳が見られたであろうと推測する。

第一の「疾走」の考察は、いささかコースをはずれて疾走したが、論を第二の「疾走」の考察に軌道修正しよう。

第二の「疾走」は、フランス公使 *sen Roche* のそれである。鷗外の「堺事件」の記述は次のようになってゐる。

フランス公使はこれまで不安に堪へぬ様子で、起つたり居

たりしてゐた。此不安は次第に銃を執つて立つてゐる兵卒に波及した。姿勢は悉く崩れ、手を振り動かして何事かさ、やき合ふやうになつた。丁度橋詰が切腹の座に着いた時、公使が何か一言云ふと、兵卒一同は公使を中に困んで臨検の席を離れ、我皇族並に諸役人に會釋もせず、あたふたと幕の外に出た。さて庭を横切つて、寺の門を出るや否や、公使を抱擁した兵卒は驅歩に移つて港に走つた。

この記述に先立つ土佐兵の切腹の描写は、この国の封建時代の武士が、その時代と階級と個人の課す精神的鍛練によつて体得した生死超克における水準の高さを物語つて余りある。それは確かに西洋人の遙かに及ばぬところであり、西洋人を圧倒する。臨検のフランス公使は、最初の箕浦猪之吉の切腹の時点から、既に「驚該と畏怖に襲われ」ている。そうした切腹に接しての西洋人の反応は、土佐兵の健気さ精神力の高さ強さを証明するがごとくである。しかし、見方を変えて見るならば、土佐兵の切腹に接しての西洋人の反応に見られる生理は、人間的な自然さを示すものでもある。その動揺や不安や退席という行為は、その自然な生理に基づくものであり、それは更に犠牲者の救済の意志にまで発展するのである。公使の退席により、切腹は十一名のそれが終つたところで中止せられ、子の刻になつて、薩摩、長門、土佐、因幡、備前、肥後、安藝の七藩の家老がフランス側の意向を伝えること

になる。それによれば、「フランス公使は、土佐の人々が身命を軽んじて公に奉ぜられるには感服したが、何分その惨憺たる状況を目撃するに忍びないから、残る人々の助命の事を日本政府に申し立てると云った」というのである。従って、「惨憺たる状況を目撃するに忍びない」のは、東洋の側からすれば、或る種の弱さかも知れぬが、少くとも西洋の側からすれば、人間的であり、自然であり、かつ助命という humane なる営為につながる以上、それは一つのヒューマニズムの体現として、決して嘲笑の対象とならないものである。

大岡氏は、少くともその鷗外の「堺事件」批判の論の執筆の段階では、Roche の「驛歩」を「遁走」と嗤っているのであるが、これは甚だその論を軽薄なものにしているのである。

Roche の「驛歩」を西洋的ヒューマニズムの面から評価する読みは、私の発明ではない。ニュアンスの違いはあるが、すでに若上順一氏の「歴史文学論」にそれが認められる。戦時中にかゝる論を為すためには、多分の配慮を必要とし、控え目な表現となつてはいるが、氏がそのような問題意識を持った読みをなされたところには、深い感動を禁じ得ない。

鷗外の「堺事件」の二つの疾走について考えてみたのは、つまるところ、この作品が、大岡氏がその旧い論文で極めたような、その「主人」とされる山県有朋に奉仕するために為されたものではなく、逆にこの小説もその「主人」を意識するならば、危

険千万な性格を有する作品であることをいいたかったからに外ならない。

又、大岡氏がその生存中に果せなかったその論の訂正への意志を付度し、その輪廓をおぼろげながら示したかったことも動機の一つであるが、その僥倖非礼の寛恕を氏に乞うておきたい。

〈追記〉 本稿は、平成五年度高野山大学密教研究会における口頭発表「堺事件と二人の作家——鷗外と大岡昇平——」、平成五年度高野山大学国文学会研究発表会における口頭発表「『堺事件』二つの疾走」にもとづくものである。

註

※1 フランス側代表は、仏艦デュプレックス号艦長ベルガス・デュ・ブチートアールというのが史実。鷗外の「堺事件」では、公使ロツシュとなっているが、それは史実に反する。

※2 初出は雑誌「世界」昭和五十年六月号。後、同雑誌七月号の分と併せて「文学における虚と実」（講談社刊）に収める。

※3 初出は「評言と構想」五号。後、「日本文学研究資料叢書 森岡外」に収録される。

※4 櫻本富雄氏の「大東亜戦争と日本映画 立見の戦い」（晋書店刊）によって確認したところによると、昭和十八年の制作になる松竹映画。監督は、辻吉郎・アキノ真三。斎藤達雄、岡村文子、高田浩吉、

宮城千賀子が出演している。

※5 岩波版『陶外全集』による。以下同断。

※6 実は、大岡氏は、「『堺事件』の構図——森鷗外における切盛と投造——」においても、谷千城の名を出しているのである。しかし、その時点ではこの件がこれほど重大な意味を有していると気づいていない節がある。

※7 昭和十七年中央公論社刊。

※8 岩上順一氏の所論の眼目は、堺事件を一つの象徴的事件と見て、陶外の作品の中に時代の流れの力学をダイナミックに捉えるところにある。この論を岩上氏がものした時代が時代だけに、土佐兵の行跡、特に箕浦猪之吉のそれに「国民的英雄イズム」の「高潮」を認め称揚するものの、その象徴的事件の結果するところの構造を、「日本的モラルの歴史的異常性と、フランス的ヒューマニズムの開化性との相互の衝突によって生み出された複合的な力の合成」とする卓見を提示している。そこには、フランス側に、価値としてのヒューマニズムを認める「眼」が把握できる。それは、昭和十七年という「時代」に於ては希有のものとして高く評価されてしかるべきであろう。

（高野山大学教授・第一回卒業生）